

婚約者の兄に恋してたのがバレた夜、嫉妬に狂った公爵家次男に
孕むまで何度も何度も抱き潰されました

「君は僕の婚約者だろう？　なのに、なぜ兄さんのところに行こう
としたんだ？」

月明かりに照らされた瞳が、ぞつとするほど冷たく光っている。
「僕が気づいていないとでも思った？　……ずっと前から知ってた
よ」

心臓が凍りついた。絶対に知られてはいけない思いだったのに。

「……何年、我慢したと思う？」

耳元で囁かれて、背後から抱きすくめられた。逃げ場がない。

「イって。僕の指で、舌でイって」

容赦なく与えられる快感に、抗えなかった。

「兄さんのこと考えられなくなるくらい、僕で満たしてあげる」
激しい腰の動きに、頭が真っ白になる。

「孕むまで何度でも出してあげる」

何度も何度も中に注がれて、もう数えることすらできない。

「……やっと、僕だけを見てくれたね」

意識が遠のく直前、囁かれたその声は——どこか安堵しているようだった。

どうして、こうなったのか。

——話は、数日前に遡る。

ノクティス公爵家の庭園は、今日も美しく手入れされていた。

季節の花々が咲き誇り、噴水の水音が心地よく響く。

私はその公爵家自慢の庭を、婚約者であるリオネル・ノクティスと並んで歩いていた。

「今日の君も、一段と美しいね」

「……お世辞はいいわ」

「お世辞じゃないよ。本心」

リオネルは軽い調子でそう言って、悪戯っぽく笑う。

ライトグレーの髪が風に揺れ、金色の瞳が細められる。

その笑顔はいつも通り——軽くて、飄々としていて、掴みどころがない。

（……本心、か）

私はそっと視線を逸らした。

リオネルは公爵家の次男で、私の幼馴染であり——婚約者でもある。

物心ついた頃から、私たちは「将来結婚する」と周囲に言われて育ってきた。

政略的な意味合いが強いとはいえ、リオネルは世間的に見ても悪い相手ではない。

家柄はもちろんのこと、容姿も整っているし、その上頭も良い。冗談ばかり言うけれど、根は優しい人だと思う。

——けれど。

「ねえ、聞いてる？」

「え？ あ、ごめんなさい」

（つい、ぼうつとしちゃった……）

「……誰のこと考えてたの？」

リオネルの言葉に、私の心臓がドキッと小さく跳ねた。

思わず隣を歩くリオネルの方を見上げると、いつものように余裕のある表情で微笑んでいる。

「ちゃんと僕の話聞いてよね」

少しだけ拗ねたような口調でそう言った。幼い頃から変わらないトーンで、私はほっと肩の力を抜く。

私は誤魔化すように曖昧に微笑んで、「何の話だった？」と尋ねた。

「明後日の晩餐会の話。兄さんも出席するって」

「……へえ。そうなの」

——兄さん。

その言葉に、また落ち着いてきていた鼓動が速まった。

「兄さんも忙しいのに大変だね。最近王宮に呼び出されてばか

りで、全然屋敷にも戻ってこないし」

リオネルは何でもないことのように言う。でも——私の頭はすぐに支配されてしまうのだ。

——アレクシス・ノクティス。

リオネルの兄であり、公爵家の嫡男。

金色の髪に、空のように澄んだ青い瞳。

誰もが振り返るような完璧な容姿と、それに見合うだけの才覚を持つ。

そして——私がずっと、密かに想いを寄せてきた人。

「……どうかした？」

リオネルの声で我に返る。

見れば、彼は不思議そうに私の顔を覗き込んでいた。

「い、いいえ。何でもないわ」

「ふうん？」

リオネルは首を傾げたが、それ以上は追及してこなかった。

（……これも、いつものことだ）

彼はいつも、深いところまでは踏み込んでこない。

——でも、私たちはいい関係を築けている。お互いに情熱的な想いはなくとも、このまま結婚すれば誰もが羨むようないい夫婦になれるだろう。

結局のところ、リオネルの側も、私のことは婚約者として認めてはいても、本心を晒け出すような関係性は求めていないのだから、今のままでいい。

（……そのおかげで……リオネルはこの想いに気付いていないのだから）

晩餐会の当日――

私は侍女に髪を整えてもらいながら、落ち着かない気持ちを抑えるのに必死だった。

（アレクシス様に会える……）

最近王宮での務めが忙しらしく、屋敷で顔を合わせる機会がほとんどなかった。

久しぶりにお会いできる。そう思うだけで、胸が高鳴って仕方がない。

鏡の中の自分を見つめる。

淡い水色のドレスに、控えめな宝石のアクセサリ。

リオネルの婚約者として恥ずかしくない装いのはずだ。

(……リオネルの……婚約者……なのよね)

ふと、胸の奥がちくりと痛んだ。

私は想い人の弟の婚約者。この想いが叶うことは、絶対にない。分かってる。分かってるのに——心はずっと、アレクシス様を追いかけてしまう。

最低だと——自分でも、そう思う。

「お嬢様、そろそろお時間です」

「ええ、ありがとう」

私は小さく息をついて、部屋を出た。

大広間には、すでに多くの貴族たちが集まっていた。

「やあ、遅かったね」

入口でリオネルが待っていた。

黒を基調とした正装は、彼のライトグレーの髪によく映えている。

「お待たせしてごめんなさい」

「いいよ。その分、綺麗になって来てくれたんだから——そのブル
ーのドレス、君によく似合ってる」

さらにと褒め言葉を口にして、リオネルは私の手を取る。

エスコートの仕方は完璧だ。傍から見れば、理想の婚約者に見える
だろう。

「さあ、行こうか」

「ええ」

リオネルに手を引かれながら、私は無意識に広間を見渡した。

（——いた……）

広間の中央、ひとときわ人だかりができている場所。

その中心に立つ、金色の髪——アレクシス様だ。

彼は周囲の貴族たちと談笑している。

穏やかな微笑みを浮かべ、誰に対しても丁寧に対応しているその姿は、まるで一枚の絵画のように美しかった。

「……」

見惚れている自分に気づいて、慌てて視線を逸らす。

（私としたことが……こんなのいけないわ……）

「あ、兄さんだ。挨拶しに行こう」

リオネルがそう言って、私の手を引く。胸が早鐘を打ち始める。

「リ、リオネル、私は——」

「大丈夫だよ」

私の動揺に気づいているのかいないのか、リオネルはいつもの軽

い笑顔のまま、アレクシス様のもとへと歩いていく。そして、人だかりの前で足を止めた。

「兄さん、久しぶり」

「ああ、リオネル。それに……」

アレクシス様の青い瞳が、私を捉える。

「久しぶりだね。ずいぶんと美しくなった」

「あ、ありがとうございます……」

声が上ずる。一気に顔が熱くなって、私は思わず下を向く。

こんな簡単な挨拶すら、まともにできない自分が情けなかった。

「リオネルとは仲良くやっているかい？」

「……はい、とても」

嘘だ。大切にされているのは、分かっている。仲も悪いわけではない。でも、私たちは別にお互いを想い合っているわけではないの

だ。

「そうか。良かった」

アレクシス様は満足そうに微笑んで、リオネルの肩を叩いた。

「弟をよろしく頼むよ」

「……はい」

その言葉が、胸に突き刺さる。

——弟を、よろしく。

当たり前だ。

私はリオネルの婚約者で、アレクシス様にとっては「弟の相手」でしかない。

けれど、アレクシス様にだけは言われたくない言葉だった。

「さ、僕たちも席に着こうか」

リオネルが再び私の手を取る。

振り返ると、アレクシス様はもう別の貴族の方たちと話し始めていた。

(……分かってる。分かってるのに)
どうして、この想いは消えてくれないのだろう。

——このとき私は、まだ知らなかった。
隣を歩く婚約者が、どんな目で私を見ていたのかを。

晩餐会は和やかに進んでいた。

豪華な料理が次々と運ばれ、貴族たちの上品な笑い声が広間に響く。

私はリオネルの隣で、求められるままに微笑みを浮かべていた。

「今日の料理、美味しいね」

「そうね」

「特にこのソース。シェフに作り方聞いてこようかな」

「……料理なんてしないでしょ」

「しないけど、今度君が来た時に喜んでくれるかなって」

リオネルがいたずらっぽく笑う。私は呆れながらも、つい口元が緩んでしまう。彼といると気を遣わずに済む。肩肘張らずに自分らしくいられるのだ。

（……リオネルのことを好きになれたらいいのに）

そう、頭では分かっているけど、心はなかなか思い通りにはいかな

かった。

そうして和やかに談笑していると、ふと広間の奥に目をやった。アレクシス様が、上座で誰かと話しているのが目に入ってきた。相手は見覚えのない女性だった。

何より気になったのは——アレクシス様との距離感だ。

二人の間には、どこか親密さを感じさせる空気が漂っている。

アレクシス様が何か囁くと、彼女は嬉しそうに微笑む。アレクシス様もまた、普段の完璧な微笑みとは違う、どこか砕けた表情を浮かべていた。

(……あんな顔、見たことない)

まるで、二人だけの世界があるかのようにだった。

(……誰なんだろう、あの人)

胸がざわつく。

こんなふうじつと見つめるなんてはしたないと分かっているのに、目が離せない。

「どうかした？」

リオネルの声に、びくりと肩が跳ねる。

「べ、別に……」

何でもないと言おうとして、ふいに広間の空気が変わった。

アレクシス様が立ち上がり、グラスを軽く鳴らす。そうすると、話し声が止み、全員の視線が彼に集まった。

「皆様、本日はお集まりいただき、ありがとうございます」

朗々とした声が広間に響く。

アレクシス様は穏やかに微笑みながら、隣の女性の手を取った。

「この場をお借りして、皆様にご報告があります」

心臓が、嫌な音を立てて跳ねる。

（——まさか……）

「このたび、私は婚約いたしました」

広間がどよめく。

祝福の拍手が起こり、歓声が上がる。

「……っ」

息ができない。

（婚約……アレクシス様が……婚約……？）

手に持っていたグラスが、かすかに震える。落としてしまわないように、両手でしっかりと握りしめた。

（分かっていたはずなのに……）

私はリオネルの婚約者で、アレクシス様とは何の関係もない。

彼がいつか誰かと結ばれることくらい、覚悟していたはずなのに。

なのに——

胸を鷲掴みにされたような痛みが、全身を駆け巡る。

息が苦しい。

笑わなければ。祝福しなければ。私は公爵家の婚約者として、この場にふさわしい振る舞いをしなければ。

（なのに——こんなに胸が苦しいなんて……）

目の奥が熱い。

泣いてはいけない。ここで泣いたら、私の想いが、誰にも知られてはいけない想いが、露見してしまうかもしれない。

「おめでとう、兄さん」

隣で、リオネルが立ち上がった。

穏やかな笑顔で、グラスを掲げている。

その声が、ひどく遠く聞こえた。

「ほら、君からも祝福の言葉を」

顔を上げると、隣でリオネルが私を見下ろしている。

（……何か、言わなきゃ……）

リオネルの婚約者として、祝福の言葉を求められている。

会場中の視線が私に向けられている。

私は震える足で、なんとか立ち上がった。せっかく丁寧に紅を引いた唇もすっかり乾いていた。

声の出し方を忘れてしまったみたいに、喉の奥がじんじんと痛んだ。

（……私は伯爵家の娘でしょう？）

自分を奮い立たせて、ようやく口を開く。

「……おめでとう、ございます。アレクシス様」

自分の声が、誰か他人のもののように聞こえた。

ちゃんと笑えているだろうか。顔が引きつっていないだろうか。

アレクシス様がこちらを見て、穏やかに微笑んだ。

「ありがとう。君たちにもずいぶん待たせてしまったね。次に続いてくれると嬉しい」

——君たちも。

リオネルと、私のことだ。

アレクシス様にとって、私たちは「お似合いの婚約者同士」でしかないのだ。

当たり前だ。最初から、そうだったのだから。

リオネルとの結婚が先延ばしになっていたのは、嫡男であるアレクシス様の婚姻が優先されていたからだ。

（……だから私は、この想いをずるずると手放せずにいたのかもしれない……）

「ええ、ありがとうございます」

何を答えたのか、自分でもよく分からなかった。

晩餐会が続く中、私は、ただ、グラスを持つ手が震えないように、必死で力を込めていた。

隣でリオネルが何か言っている。周囲から笑い声が上がる。

私は作り笑いを浮かべながら、ただその場をやり過ごすことだけを考えていた。

ふと、隣から視線を感じた気がした。

でも振り向いたとき、リオネルはいつものように軽い笑顔で別の貴族と話していた。

その夜。

晩餐会のあと、いつものように公爵家の客室に泊まることになった私は、ベッドの上で呆然と天井を見つめていた。

きっと、今の私は酷い顔をしているだろう。

婚約発表の光景が、何度も頭の中で再生される。

アレクシス様の穏やかな笑顔。

婚約者の女性を見つめる、優しい眼差し。

（あんな目で、私を見てくれたことは一度もなかった）

ただの政略結婚ではないということが、二人の雰囲気からも伝わってきた。——残酷なまでに。

枕に顔を埋める。

涙はもう出ない。代わりに、胸の奥がずっと重い。

このまま、何も言わずに終わるのか。

想いを告げることもなく、ただ諦めるのか。

（……嫌だ）

心の奥底で、何かが叫んでいた。

このまま終わりたいくない。

せめて——せめて、この気持ちだけでも伝えたい。

たとえ叶わなくても、自分の中ではじめをつけたい。

（……私も、ちゃんと自分の気持ちに整理をつけなきゃ）

何も言わずに、心にアレクシス様への想いを抱えたまま、リオネ
ルと婚約者でいるのはあまりに不誠実だ。

気づけば、私はベッドから起き上がっていた。

夜は深く、屋敷は静まり返っている。

今なら、誰にも見られずにアレクシス様の部屋へ行ける。

（馬鹿げてる……）

そんなことは、分かっている。

婚約者のいる人に告白するなんて、最低だ。

しかも私自身、リオネルの婚約者だというのに。

でも――

長年抱えていた想いを手放すにはこうするしかないのだ。

私はドアに手をかけた。

廊下に出て、足音を殺しながら歩き出す。

アレクシス様の部屋は、東棟の奥だ。

幼い頃に何度カリオネルと訪ねたことがあるから、場所は分かっている。

月明かりだけが廊下を照らす中、私は一步一步進んでいく。

心臓がうるさいくらいに鳴っている。

何度も足が止まりそうになった。

（何を言えばいいんだろう……？

好きでした……？

でも諦めま

す……?)

どんな言葉を選んでも、きっとアレクシス様を困らせるだけだ。それでも——足は止まらなかった。

考えがまとまらないまま、東棟にたどり着いた。

アレクシス様の部屋の前。

重厚な扉が、月光に照らされている。

深呼吸をして、ノックしようと手を上げた——そのとき。

背後で、かすかに気配がした。

「……?」

振り返る前に、腕を掴まれた。

「……っ!」

声を上げる間もなく、ぐいっと身体を引き寄せられる。

暗がりの中、誰かの胸に抱きこまれた。

月明かりは私のいる場所までは届かない。つまり——相手の顔が、まったく見えなかった。

（だ、誰……!？）

不審者？ それとも——

悲鳴を上げようとした瞬間、唇を塞がれた。

驚きで思考が止まった。

柔らかくて、熱い感触。

それが「口付け」だと理解するまで、数秒かった。

「んっ……!」

反射的に相手の胸を押すけれど、びくともしない。

むしろ、腰に回された腕に力が込められて、さらに強く引き寄せられた。

（怖い……! 誰なの……!？）

必死でもがくけれど、力の差は歴然だった。

口づけは深くなっていく。

ついには舌が侵入してきて、私の中を蹂躪する。

ちゅ♡くちゅ♡

暗闇の中、淫靡な水音だけが廊下に響く。

「ん、う……っ」

熱い舌が私の舌に絡みつく。

逃げようとしても、後頭部を押さえられて動けない。

ただされるがまま、口内を貪られ続けた。

ようやく唇が離れたとき、私は相手の腕の中でぐったりとしていた。

唇の端から、つう……と唾液が糸を引いて垂れる。

「……っは、あ……」

荒い息の中、暗闇に目を凝らす。

月明かりが雲間から差し込んで、ようやく相手の輪郭が浮かび上がった。

ライトグレーの髪。金色の瞳。

「——リオネル……？」

見知った顔に、一瞬だけ安堵しかけた。

——けれど。

「……兄さんだとも思った？」

その声は、いつもの軽やかな響きとはまるで違って、低く、冷たく、嘲るような声。

「残念だったね。僕だよ」

月光に照らされた瞳が、ぞっとするほど昏く燃えていた。

「リ、リオネル……？ どうして……」

「どうして？」

リオネルは低く笑った。その笑い声が、背筋を凍らせる。

「こっちが聞きたいよ。どうして君は、兄さんの部屋の前にいるの？」

「それは……」

「こんな夜中に。一人で。ノックしようとして」

言葉が出ない。何を言い訳しても、無駄だと分かっていた。

「黙ってるってことは、やっと認めるんだ？」

リオネルの手が、私の顎を掴む。無理やり顔を上げさせられて、目が合った。

「言ってごらん。兄さんに、何を伝えに来たの？」

「……っ」

「愛の告白？」

びっくりと肩が跳ねる。それだけで、全てを察したのだろう。リオネルの目が、さらに冷たくなった。

「違うの、私は……」

「……嘘は感心しないな」

リオネルはそう言うのと、私の手首を掴んだ。

「ちょっと、来て」

「え……っ、リオネル!？」

返事を待たずに、引きずられるように歩かされる。

暗い廊下を、足早に進んでいく。

（どうしよう……リオネル、怒ってる……?）

いつも飄々としていて、何を考えているか分からない人だった。

怒っているところなんて、見たことがない。

なのに今、手首を掴む力は痛いほどで――

「どこに……」

「黙って」

短く遮られて、それ以上何も言えなくなる。

（こんなリオネル、初めて見る……）

向かう先は——アレクシス様の部屋とは逆方向だった。

やがて、見覚えのある扉の前で足が止まった。

リオネルが扉を開け、私を中心に押し込む。

「……ここ……」

月明かりが差し込む室内。

壁一面の本棚。重厚な書き物机。窓際の古いソファ。

——幼い頃に三人でよく遊んだ、書斎だった。

「懐かしい？」

背後で扉が閉まる音がした。カチャリ、と鍵をかける音も。

（閉じ込められた……？）

胸の奥がざわりと騒いだ。でも、恐ろしくて振り返ることができなかった。

「子どもの頃、よくここで遊んだよね。僕と、君と……兄さんと」
リオネルの声が、暗がりの中に響く。

「君はいつも兄さんの隣に座りたがったよね。『アレクシス様の近くがいい』って」

「……っ」

（そんな昔のこと、覚えてたの……？）

私自身、もう忘れていたような幼い頃の記憶。なのにリオネルは、ずっと覚えていた。

「……あの頃から気づいてたよ。君が誰を見てるか」

背中に、リオネルの体温が近づいてくる。

（嘘……だって、リオネルはいつも何も気にしてないみたい……）

「……何年、我慢したと思う？」

耳元で感情を押し殺したように低く囁かれて、身体が震えた。

「リオネル……」

（我慢って……どういう意味……？）

頭が混乱する。リオネルは婚約者として大切にしてくれてはいるが、私自身には興味がないと思っていた。

なのに――

「ねえ」

後ろから抱きすくめられる。逃げ場がない。

「今夜からここは、僕と君の場所にしよう」

その声は甘いのに、有無を言わせない響きがあった。

「リオネル、待つ……」

「待たない」

後ろから強い力で抱きすくめられたまま、耳朶に熱い吐息がかかる。

「もう何年も待った。これ以上は無理」

そう言って、耳の縁をちろり♡と舐められた。

「ひっ……♡」

思わず身体が跳ねる。

耳に触れられるだけで、こんなに敏感に反応してしまうなんて。自分でも知らなかった感覚に、私は羞恥心を覚える。

「ここ、弱いんだ？」

くすりと笑う声が聞こえる。

いつもの軽い笑い方じゃない。どこか暗い、粘りつくような笑み。

「知らなかったな。……僕の知らない君が、まだまだあるんだね」

「やめ……っ、あ……！」

耳の穴に舌先を差し込まれて、頭が痺れた。

くちゅ♡　じゅる♡

卑猥な水音が、耳から直接脳内に響いてくる。

「ん、あ……っ、リオネ、ル……！」

「いい声」

耳から首筋へ、唇が移動していく。

啄むように、時折歯を立てながら、肌を這っていく。

「兄さんは、君のこんな声を聞くことはないんだね……」

「……っ」

「残念？」

強く訊かれて、思わず首を振った。

「そんなこと……」

「……また、そうやって嘘をつく。君がこうされたいのは僕じゃないだろ？」

その言葉と同時に、背中のドレスの留め具に手がかかった。

「ま、待って……！」

「待たないって言ったと思うけど？」

ぷつり、ぷつりと、ひとつずつ外されていく。

焦りと恐怖で心臓は早鐘のように鼓動を打つ。なのに、身体は動かなかった。

（……逃げなきゃいけないのに……）

ドレスが肩から滑り落ちる。

薄い肌着一枚になった身体を、背後から抱きしめられた。

「……綺麗だ」

耳元に吐息がかかり、頬に熱が集まる。

「……そんな君の瞳に映るのはいつも兄さんなんだ」

リオネルの手が、肌着の上から胸に触れた。

「僕がどんな気持ちだったか、分かる？」

「あ……っ」

指先が、胸の頂きを探り当てる。薄い布越しに、くりくりと弄ばれた。

「こうやって触りたかった。……ずっと」

知らない感覚が、背中から全身へ駆け上がっていく。

「……ずっと、ここを触ったら君はどんなふうに鳴くんだろうって、

想像してた」

くにくに♡　こりこり♡

「やあ……っ、そんな……！」

「こんなに固くなってる。気持ちいいんだ？」

「ち、が……っ」

「何が違うの？」

意地悪く指先できゅっ♡とつねられて、甘い声が漏れた。

「あっ……♡」

「ほら。思ったとおり、可愛い声」

リオネルが私の身体を反転させた。

暗がりの中、美しい金色の瞳と目が合った。

その目は、いつもの優しい瞳ではなく、まるで獲物を前にした獣のようだった。

「……こっちへおいで」

「え……？」

手を引かれて、書斎の奥へ連れていかれる。そこには、姿見があった。

月明かりに照らされた鏡の前に立たされる。

「これから僕が君にすること、全部見ててね」

背後からリオネルに抱きしめられながら、鏡の中の自分と目が合った。

肌着がはだけ、顔を紅潮させた、伯爵家令嬢としてあるまじき姿。

「……嫌っ」

私は思わず目を逸らした。こんな姿は許容でなかった。

「目を逸らさないで」

後ろから顎を掴まれ、無理やり鏡を見させられる。

「……今から君を気持ちよくするのが誰なのか、ちゃんと見て」
そう言っ、リオネルは私の肌着の肩紐に指をかけた。
するり、と布が滑り落ちて、胸があらわになる。

「あ……っ」

思わず腕で隠そうとしたけれど、すぐに手首を掴まれた。

「隠さないで。見せて」

「で、でも……」

「僕に見せたくない？」

その問いに、答えられなかった。

リオネルは黙ったまま、私の腕をそつと下ろさせる。

鏡の中に、裸の上半身が映った。

（……こんなの……許されないわ……）

婚姻前の乙女が、婚約者とはいえ異性の前でこんな姿を晒すなん

て。

「……やっぱり綺麗だ」

背後から手が伸びて、大きな手で両胸を包み込まれる。

もみ♡もみ♡

「ん……っ」

「ここも」

指先が、露わになった乳首に触れた。直接接触されると、布越しとは比べものにならないくらいの刺激が走った。

「ひぁ……っ♡」

「可愛い乳首だね。色も形も想像以上だ」

くりくり♡ こりこり♡

左右同時に弄られて、膝が震え出す。

「あっ、あっ……♡ リオネ、ル……♡」

「立ってられなくなってきた？」

意地悪く笑いながら、リオネルはプルプルと震える私の腰を支えた。

そしてそのまま、鏡面に両手をつかせるように身体を傾けさせる。

「っ……こ、こんな格好……」

「うん。……はしたないね？」

耳元で囁かれて、顔が熱くなる。

お尻を突き出すような体勢。脚を開かされて、一番見られたい場所をリオネルの方へと突き出される。

「……いい眺めだ」

背後に膝をついたりリオネルの気配を感じた。

「君がどんな顔で感じてるか、どこが気持ちいいか……全部、僕だけが見られるんだね」

ぴちゃ♡　ぴちゃ♡

ぬるっとした何かが、秘部に触れた。

「ひっ……!!?　な、何……っ」

「何って……分かるでしょ？」

リオネルの熱い舌が、秘裂をゆっくりとなぞり上げた。

「んあぁっ……♡」

（う、嘘……っ、そんなところ、舐めて……!!?）

「ここ、もうこんなに濡れてる」

れろれろ♡　ぴちゃ♡　ぴちゃ♡

リオネルが舌を這わせれば這わせるほど、私の中からトロトロとした液体が溢れ出しているのが自分でもわかる。

「もう……やめ……っ」

「ここは嫌がってるふうには到底思えないけど？」

とろとろ♡ぴちゃぴちゃ♡

「ち、違……っ、これは……」

（違う、感じてなんかない……っ）

でも——私の身体は、私の意志とは裏腹に熱を持ち始めていた。舐められている箇所がじんじんと疼いている。

「違わないよ」

ちゅぽ♡ちゅぽ♡

はしたない音を立てて、柔らかい襷を吸われた。

ちゅるる♡じゅるる♡　じゅるるるる♡

最初は優しく啜っていたのが、だんだんと激しさを増していく。

「あっ、あああ——っ……♡」

腰が勝手に跳ねる。逃げようとしても、お尻をがちり掴まれて動けない。

（いや……っ、こんなの、知らない……っ）

こんな快感、想像したこともなかった。

教養として知っている夫婦の営みは、こんなんじゃない。

（……そんなとこ、舌で舐めるだなんて……）

「逃げないで。……まだ始まったばかりだよ」

っんっん♡

リオネルの舌先が一番敏感な場所を突いてくる。

「ひあっ♡ そこ、だめえ……っ」

「ここのこと？」

くりっ♡ と、小さな突起を舌で弾かれる。

「やあっ……♡♡」

（何、これ……っ、頭がぼうつとする……）

「すごく固くなってる。ここが気持ちいいんだ？」

れろれろ♡　ちゆく♡　じゅるるるるる♡

執拗に舐め上げられて、思考が溶けていく。

「あっ、あっ、あーッ……♡　リオネル、待っ……♡」

「待たないってば」

じゅるるるるるる♡

「ひあああっ……♡♡」

敏感になりすぎているクリトリスを強く吸われ、喉の奥から悲鳴が上がる。

がくがくと膝が震える。鏡を支える腕も限界だった。

（どうしよう……立ってられない……♡）

「ねえ、鏡見て」

「い、嫌よ……っ」

「見て」

命令するような口調に、私は抗うことができず、震える首を持ち上げて、言われたとおりに鏡を見た。

そこには――顔を真っ赤にして、与えられる快感にドロドロに蕩かされているはしたない女がいた。

(……これが、私……?)

伯爵家の令嬢として恥じない振る舞いを、と幼い頃から厳しく躾けられてきた。

なのに今、鏡に映る私は――

「これが今の君だよ。僕に恥ずかしいところをいっぱい舐められて、ここをこんなにぐちよぐちよにして」

そう言つて、リオネルはちゆく♡ちゆく♡とわざとらしい音を立てながら、私の秘部を指で擦り上げる。

「君にも聞こえるだろう？ ほら、もっとその可愛い顔を見せて

「？」

「見ないで……お願い、見ないでえ……っ」

（こんなみつともない姿、誰にも見られたくない……っ）

「どうして？　とっても可愛いのに」

私は返事もできず、キツく目を瞑ってふるふると首を振った。こんな辱めをこれ以上耐えられそうもなかった。

けれど――

じゆる♡じゆる♡じゆるるる♡

「ひい……っ♡」

突然、舌での愛撫を再開されて、私は思わず悲鳴をあげた。

「……もっを見せて」

さっきまでの冷たい声とは違う、熱を帯びた囁き。

舌先が花芯を軽く弾いたかと思うと、そのまま下へ降りていく。

「リオネル、そこは……っ」

懇願も虚しく、舌が奥へと侵入してきた。くるくると内壁を撫でまわされ、背筋が痺れる。

外側を丁寧な啄んでいたかと思えば、次の瞬間には中をえぐるように舐め上げられる。

その予測できない動きに翻弄されて、腰が勝手に浮いてしまう。

「んんっ……♡中、だめ……っ」

「だめ？……でも、ここ、すぐく締めつけてきてる」

低く笑う声が、下腹に響いた。

ずちゅ♡ くちゅくちゅ♡

舌で中と外を順々に責め立てながら、リオネルは同時に指がクリトリスを弄り始めた。

「あああっ……♡ そ、それ、だめえ……ッ♡♡」